

平成22年 5月 6日現在

研究種目：若手研究 (B)
 研究期間：2008～2009
 課題番号：20720139
 研究課題名 (和文) 地域日本語教室における外国人支援者の存在意義と、かれらの「語り」に関する研究
 研究課題名 (英文) The raison d'être of foreign supporters in local Japanese language study groups and their own narratives
 研究代表者
 御館 久里恵 (OTACHI KURIE)
 鳥取大学・国際交流センター・講師
 研究者番号：60362901

研究成果の概要 (和文)：

本研究では、地域日本語教室等で支援者として活動する8人の外国出身者を対象に、ライフストーリーインタビューと、実際の支援活動の記録をおこなった。かれらのライフコースとその各段階での学び、また現在の支援活動のあり方を分析することにより、「居場所」としての地域日本語教室の重要性、生活者としての外国人の言語使用状況や自律性を尊重した支援活動の必要性、さらに「ロールモデル」としての外国人支援者の存在意義を明らかにした。

研究成果の概要 (英文)：

In this study, life story interviews and recording of language supportive activities were conducted on 8 supporters who also had come to Japan from foreign countries. Through the analysis of their life courses and learning at each stage and the analysis of the way of their supportive activities, three points became clear: the importance of local Japanese language study group as a "place where one can be oneself", the need for a supportive activity which respects foreign residents' daily language use and their autonomy, and the raison d'être of foreign supporter as a "role model".

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：日本語教育

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：地域日本語教室，日本語学習支援，外国人支援者，ライフストーリー，居場所，自律性，ロールモデル

1. 研究開始当初の背景

地域の日本語教室等で活動するボランティアの数は、年々増加しているが、その中に

は、日本語を母語としない外国出身者もいる。かれら（「彼」「彼女」を含む。以下同じ。）が新しく来日した外国人住民にとってのモ

デルとなり、母語を介して相談にのったり、自らの学習経験を生かして日本語学習を支援したりと、その存在意義が大きいことは想像に難くない。しかし、実際にかれらが来日後どのように地域社会で生活してきたのか、どのような思いをもって現在の支援活動に携わり、具体的にどのような活動をおこなっているのかは、これまで明らかにされていなかった。

2. 研究の目的

本研究は、地域日本語教室等において支援者として活動している外国出身者（日本国籍を持つ人もいるが、以下、「外国人支援者」と記す。）を対象に、聞き取り調査と実際の学習支援活動の記録をおこない、かれらのライフストーリーとかれらが考える活動の意義、そして支援活動の実際を明らかにする。それによって、地域日本語教室等に外国人支援者が参加することの意義を明らかにするとともに、かれらの視点から支援のあり方を捉えなおすことを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 調査方法

日本国内の各地で活動する外国人支援者（運営者も含む）8名（A～Hさん）に調査を依頼し、個々にインタビューをおこなった。インタビューでは、各調査協力者の来日前から現在までの個人史を聞きとることとし、インタビューシートにもとづき、出来事とそのときの思いを、ほぼ時系列に沿って聞いた。また、現在の活動については、関わるきっかけ、活動内容、楽しいこと・大変なこと、今後の展望という大まかな質問項目を立てて聞いた。どちらもインタビューシートを用意したが、協力者の語りに応じて、質問の内容や順序を臨機応変に変えていく「半構造化インタビュー」の形をとった。インタビューをしながらインタビューシートにメモすると共に、すべてICレコーダーで録音した。

8名のうち6名については、実際の学習支援活動を、活動団体および学習者にも了承を得た上で録音・録画した。また筆者が観察しながらフィールドノートをつけた。うち1名は本人が学習している活動、3名は母語学習支援の活動であったため、2名の学習支援活動を分析の対象とした。

(2) 分析方法

インタビューのデータは、すべて漢字・かな混じり文で文字化し、語り手の発話ごとに、コード（語りを要約する、あるいは特徴づける短い文またはタイトル）をつけ、それをもとに、まずクロノロジー（時間的配列）による編集をおこない、個々のライフストーリーを構成した。さらに、全員のライフストーリー

における共通のテーマを抽出しながら考察をおこなった。また、現在の活動についての語りについても共通のテーマを抽出し、かれらが考える支援活動の意義を明らかにした。

学習支援活動のデータは、日本語で話されている箇所はすべてひらがな・カタカナを用いて文字化した。スペイン語をベースにおこなわれていた学習支援活動のデータは、スペイン語母語話者に、文字化とスペイン語部分の翻訳を依頼し、その後、日本語での発話部分の確認や発話者の同定等を筆者がおこなった。文字化データを基に、まず全体構成の分析をおこなった。また、談話を詳細に分析することにより、外国人支援者による活動として特徴的な点を抽出した。

4. 研究成果

(1) 外国人支援者のライフストーリー

①他者との関係・居場所と、ことば・学び
外国人支援者たちの多くは、ライフサイクルの様々な段階で「ことば」の問題につきあっている。そこでの「ことば」は「他者との関係」をきりむすぶことと密接につながっており、であるからこそ、強烈な印象を伴ってかれらの前に立ちはだかっている。このような問題は、「ことば」だけを切り離して、すなわち学校などでテキストを使って言葉を学ぶような方法では、決して解決されないものであった。また、家族間で「ことば」の摩擦が生じると、それはより一層大きな傷となって残ることになる。

Aさんはサッカーを通して友達ができることで、Bさんはどこに行くにも連れて歩いてくれる友達と漫画を読んだり歌を聞いたりすることで、「ことば」の問題が解消されていったことを語っており、Eさんも「話の合う友達」や「本当の友達」ができることで、失いかけた目標を取り戻して学びに向かっている。このことを考えれば、「ことば」を身につけることによって、他者との関係が結ばれていくのではなく、他者との関係がきりむすばれることによって初めて、「ことば」をめぐる問題が解消されていくのだと言える。Cさんも、子どもを連れて行ってお母さん同士友達がたくさんできた「公園」が、いちばんの学び場だったと語っている。

「他者との関係」が結ばれるということは、その人がその存在を認められる「居場所」ができることであるとも言える。Cさんが子どもを連れて行った「公園」がそうであり、Gさんが入った中国人学生の多い高校もそうである。Gさんの例からは、日本社会にいるからといって、必ずしもそのマジョリティグループで人間関係や居場所を作らなければならないということではなく、孤独を感じない居場所を確保することが重要であるとい

うことが示唆される。また、Fさんは、機械という自分の興味から車関係のエンジニアになるという目標を持つことで学びに向かっていった。「居場所」は人間関係の中だけでなく、夢中になり没頭できる「目標」の中にも見出すことができるのである。

②アイデンティティの形成と変化

アイデンティティの確立していない頃に来日した人の中には、自分を傷つけないようにするために、バリアを張ったり「日本用の自分」を作ったりしたという例が見られた。しかし、居場所ができ、人間関係や生活世界が広がっていく中で、アイデンティティも変化し、現時点でかれらはその変化の過程を振り返り、自分の言葉で語れるようになっていく。そして、かれらに共通するのは、現在の自分自身を肯定的に語っているということである。

③前向きな姿勢と、描く将来像

壮年期にあるA、B、Cさんに共通しているのが、あらゆることが自分のためになる経験と捉えて前向きに取り組もうとする姿勢であり、何をするにもまず楽しもうと考えていることである。そのように考えて生きてきたからこそ現在のかれらがあるとも言えるであろうし、かれらがライフコースの中で居場所を見つけ、地域に根ざして生きてきたからこそ、前向きな姿勢が生まれているとも言えるだろう。すでに家族や生活基盤が安定しているかれらのまなざしは、次世代を担う子どもたちに向かっている。Aさんは地元に住む子どもたちへの学ぶ機会の提供と、発展途上国への支援を考え、Bさんは子どもや若者に異文化理解の機会を提供し、啓発していくことが最も楽しいと感じ、Cさんはいろいろな国のお母さんと子どもたちが触れ合える場をつくることを目指している。

また、青年期にある4人の中でも、Eさんは大学の先生になって、外国にルーツを持つ子どもたちをサポートするシステムづくりをしたいと考えており、Gさんも自らの経験を生かして外国から来る子どもたちに接していくことを将来の選択肢のひとつとして考えている。

これまでの経験と、現在の支援活動から、未来に向けて伝えていきたいこと、作ってほしいものがかれらの中に生まれ、存在しているのである。

④まとめ

かれらのライフコースの歩みから、他者との関係が構築され、「居場所」ができることや「目標」が設定されることが、「ことば」の問題を乗り越えたり、自主的な「学び」に向かっていくのに重要であることがわかる。

このことは、眼前の「日本語学習」（子どもの場合は「教科学習」も）だけにとらわれがちな、現在の支援のあり方に一石を投じるものであり、「ライフコース」の中でその人の「学び」をとらえていくことの重要性を示唆するものである。

また、かれらのアイデンティティも、日本で生活し、他者との関係や生活世界が広がっていく中で形成され、変化してきたものであり、現在支援活動をおこなっているかれらのそれは、肯定的なものとなっている。もちろん、このアイデンティティは、これからもかれらのライフコースの中で、絶えず更新されていくだろう。

そして、自らが渡日を経験し、また現在支援活動をおこなうことで、伝えたいこと、作りたいものが生まれ、それが子どもたちと関わっていく自らの将来像にもなり、またそれによって作られる地域社会の将来像にもつながっている様子が見てとれた。

(2)外国人支援者が語る支援活動の意義

①支援活動の目的と意義

かれらが支援活動の意義としてまず挙げているのは、地域社会で暮らす外国人（あるいは外国にルーツを持つ人・子ども）が、同じような背景を持つ仲間を見つけ、みんなで学びあっていこうとする「居場所」になるということである。子どもの支援をおこなっている4名は、子どもたちが自らのルーツを知り、それに誇りをもつことで、自信につながっていきたいという。フィリピンの人たちが一緒に学ぶ場をつくっているDさんも、同じような境遇の人たちが集まることにより、先に来た人の経験を伝え、そこから学んだことを皆で共有していくことの大切さを語っている。

またAさんは、「教科書」の日本語では意味がなく、それを捨てて自ら友達を作るためのことばを身につけていったとう自らの経験から、子ども自身が描く将来像と、そこから学びたいことを自分で選び取っていく自律性を尊重することを重視している。

このように、かれが支援活動で重要視するのは、自らのライフストーリーの中で、かれら自身が必要とし、それを得ることで前に進んでいくことができたものだったのである。

②自分が支援活動をおこなうことの意義

かれらは、学びに来ている人と同じ経験を共有・理解でき、自らの経験からアドバイスをすることもできることに自身の存在意義を感じている。そして大学(院)生や社会人となって地域社会で生活基盤を築いて暮らしている自分の姿を、「ロールモデル」として見せることができると考えている。また、当

事者であった経験を、外国籍住民に対してだけでなく、一緒に支援活動をおこなっている日本人に伝えていくことも、自分の役割として重要であると考えている。さらに、自身の経験をもとに、次世代に向けて、子どもや若者たちを育てたいという気持ちも強く持っている。国籍を問わず、全ての子どもたちに向けて伝えたいことがあり、それによって未来が少しでも良くなるのではないかと考えている。

③自分にとっての意義

かれらがおこなっている活動は、かれら自身にとっても学ぶことができる場であり、心を開くことができる「居場所」である。「当事者であった」かれらは、ある面では「当事者であり続けている」とも言え、活動を通して自らも学び、自らを開き、過去の自分自身と対峙し続けているのである。

④まとめ

外国人支援者が自らの経験をもとに、支援活動で何を重視するかは、支援活動のあり方を考える上で非常に重要である。眼前の状況を打開するために「教科書を使って、効率よく」という活動のあり方を振りかえり、「仲間」「居場所」「自律性」といったキーワードに注目していく必要があると考える。そして、外国人支援者はそこに「存在」することだけでも十分に「ロールモデル」としての意義を持つ。かれらのような外国人支援者がもっと増え、日本語母語話者支援者と共に活動を作っていくことが重要であると言える。

(3)外国人支援者による支援活動の実際

①外国人支援者による母語を介した活動の特徴

[詳細な説明]

学習者と共通の母語を用いるため、非常に詳細な説明が可能となる。また、単に母語を用いることができるからだけではなく、学習者として日本社会の言語使用を分析的に捉えることができているからこそ、意識化していない日本語母語話者以上に詳細な説明ができると考えられる。

[学習者の言語使用環境にあった説明・提示]

支援者自身が学習経験者であるため、学習者の現在の言語使用環境を理解・予測することができ、それに合った説明や提示をおこなっている。

[学習者からの「適切さ」に関する質問]

学習者からは、実際使用の環境(特に職場)において、特定の表現を用いるのが適切であるかどうかを問う質問が多く見られた。母語を用いることができる機会に、実際使用にお

けるより細かな使い分けを明確に理解したいと考えるのであろう。

[日本語に関する学習者の自己認識と支援者からのアドバイス]

学習者が、自分の日本語に関する現状認識を話す箇所も多く見られた。これも、母語を用いるからこそ話せることであろう。これに対し、支援者が自らの経験を語りながら、学習方法やコミュニケーションストラテジーをアドバイスしている。

[学習者の直面する問題との吐露と支援者からのアドバイス]

学習者がより具体的に経験したコミュニケーション上の問題を吐露している箇所もある。ここで支援者は、同じ経験を持つものとしてまず共感し、その後自らが行った解決策などを提示してアドバイスをしている。

[活動のイニシアチブと学習者オートノミー]

母語を使用できることにより、学習者が自ら積極的に活動のイニシアチブをとっていくこともできる。活動の中で学習者は、日頃思っていた疑問を、どんどん質問していった。このことは、学習者が自分で自分の学習についての選択をするという学習者オートノミーが発揮されているという点で非常に重要である。

[母語の使用と「間主観性」の構築]

母語を用いて説明や質問がおこなわれることで理解が促進されているのはもちろんのことだが、その日本語教室の中で、“スペイン語を母語として日本語を学んでいる自分たち”の空間を作り上げ、さらに直面する課題や経験、それに伴う感情を共有しあうことで、“スペイン語を母語として日本社会で日本語を使用する自分たち”をも共有していると言える。すなわち、かれらの間で「間主観性」が構築されている。このような社会的空間を持てることは、日本社会でマイノリティとして生活する人たちにとっては非常に重要な意味を持つと言える。

②外国人支援者による母語を媒介しない活動の特徴

[学習者の既知情報の引き出し]

新しい項目を導入する際に、「インプット」や「解説」の後に、教師がキューを出して学習者が答える「口頭ドリル」をするのではなく、「口頭ドリル」が初めから「インプット」と共におこなわれていた点が特徴的であった。これは、この教室が地域社会で生活している人たちを対象としたものであるため、学習者が生活の中ですでに見聞きして知っているものがあることを想定しているからで

あると考えられる。学習者の既知情報を引き出すことによって、予想していなかった反応が返ってくることもあるが、それも支援者は受け入れていた。

このことは、日本で生活しながら日本語を身につけた支援者が、その経験から、学習者の言語獲得状況を把握し、それを尊重している現われであると言える。

[学習経験の応用]

初歩の学習段階において、動詞の辞書形、「～ない」、「～ます」、「～ません」を同時に扱っていることも非常に特徴的な点である。支援者自身は、日本語学校で習った丁寧体を大学で友人に使っても、親密な関係を築くことができず、さびしい思いをしたという経験を持っており、このような経験から、特に「積み上げ」を重視するいわゆる「伝統的な日本語教育」からすれば異例とも思えるような学習活動を設計している。

実際に、学習者の多くは混乱することなく理解し、その後のグループワークの中でも使い分けをしている様子が観察された。

③まとめ

以上に挙げた、外国人支援者による支援活動の特徴の中には、学習者と共通の言語を持たなければできないこともあるが、それだけではなく、生活者として暮らす学習者の言語能力観の見直し、学習者の生活世界や言語使用環境から必要な学習活動を創造すること、学習者自身が学びたいことを選択する自律性を尊重することなどは、日本語母語話者支援者も取り入れていくべきことであり、その意味で、外国人支援者から学ぶところは大きいと言える。

(4)結論

以上の結果から、地域日本語教室のあり方や、そこに外国人支援者が参画することの意義について、以下のように結論づける。

1. 生活者として地域に暮らす外国人（あるいは外国にルーツを持つ人）を支援するにあたっては、眼前の「日本語学習」（子どもの場合は「教科学習」も）だけにとらわれるのではなく、「ライフコース」の中でその人の「学び」をとらえていくことが重要である。日本語教室は、心を開くことができる仲間を見つけ、関係を築き、そこを自分の「居場所」と感じられるところとしてまず存在することが必要である。
2. いわゆる「ゼロ」の状態から教室で学ぶのではなく、生活者として日々日本語とともに生きている人たちの言語能力観を改めて見直し、その人の言語使用環境や言語獲得状況を鑑みて支援活動を展

開していくこと、またその人自身が「目標」や将来像を持ち、学びたいことを選択する自律性を尊重することが重要である。

3. 地域日本語教室等において、外国人支援者はそこに存在するだけでも、新たに地域で生活する外国人にとって「ロールモデル」としての意義を持つ。またそれだけではなく、上記2点のような視点を日本語母語話者支援者に提供できるという点でも非常に貴重である。外国人支援者がさらに増え、日本語母語話者支援者と共に活動を作っていくことが必要不可欠である。

5. 主な発表論文等

[学会発表] (計3件)

①御館久里恵, 外国にルーツを持つ子どもを支援する学齢期に来日した大学生たちの語り—経験とアイデンティティの(再)構築—, 2009年度日本語教育学会研究集会第11回, 2010年3月13日, 甲南大学

②御館久里恵, 地域日本語教室における外国出身者による支援活動の意義と役割, 2009年度日本語教育学会研究集会第9回, 2009年11月28日, 愛媛大学

③御館久里恵, 地域日本語教室における外国出身支援者の背景と活動への参画のあり方, 2009年度日本語教育学会研究集会第7回, 2009年9月26日, 日本学生支援機構大阪日本語教育センター

6. 研究組織

(1) 研究代表者

御館 久里恵 (OTACHI KURIE)

鳥取大学・国際交流センター・講師

研究者番号: 60362901